

松任谷正隆の

# イ業のひとりごと

15

VOL.15 マンション暮らし

僕が2度目の引っ越しをしたのは結婚をしたからだ。練馬区にあるマンション。

青梅街道沿いにもかかわらず、割合静かだった記憶がある。

さて、このマンション誰が決めてきたのだろう。

僕がやった記憶がないのでたぶんかみさんがやったのだろう。

かみさんも僕もそれまで実家暮らし。

だからこの引っ越しは初めての家出みたいな感じだった。

暮らすようになった初めの頃は、何度も

「家に帰らなくちゃ・・」と思った。

きっと彼女も同じだったと思う。

「あ・・でも、ここが自分の家なんだ」と思うと

なんだかとても複雑な気分になった。

家出はしたけれど勘当もされたみたいで、

ここにしか居場所のない自分が妙に窮屈だった。



そういえばマンション暮らしもこれが初めてだった。

割合大きなマンションで、エレベーターは4基、バラバラに配置され、

僕たちの部屋に行くには一番新宿寄りのやつだった。

玄関を入ると右側に8畳くらいのリビング、その隣に6畳くらいの和室、玄関から左に行くと途中にトイレと浴室があり、

突き当たりは青梅街道が見渡せるダイニングキッチン、その右隣が狭い狭いベッドルームだった。

結局このマンションには1年半くらい住んでいたように思う。

あっという間に引っ越ししたのは、たしかオーナーの条件がそうだったのと、下の階の住人がやたらうるさく、

夜中に帰るだけで「足音がうるさい」などと電話をかけてくるような輩だったからである。

小さな犬を飼うようになると、苦情は夜だけでなく昼にも及んだ。

僕がその住人の顔を見ることはなかったが、かみさんは何度かあったそうだ。

いったいどんな人だったのだろう。

マンション暮らしは無理、と、僕はこの時に決めた。

インテリアは相談して決めたような気もするが、

そもそも1年半だからいしたことはやっていない、

というよりも何もやっていなかったかもしれない。

運び込んだ家具は和室に置かれたかみさんの箪笥と、

置いただけで部屋が一杯になったベッドくらいなものだ。

そういえばブルーのカバーで被われた2人掛けのソファのようなものもあったけれど、あとはスツールだけ。お客様が来たときにはどうしたのだろう。今思うと謎だらけだ。次の借家もやはりかみさんが決めてきた気がする。

でも引っ越す前に大家さんがチェックに来た。

当然のことながら原状復帰で返さないといけないらしい。

部屋にはほぼ何も手を加えていないから完璧に出来ていたと思うが、

大家は風呂場のタイルの隙間のカビを指摘したそうだ。

換気扇もなくひどい風呂場だったからカビは最初からあった気もするが、

かみさんは泣く泣く、その大家の目の前で、自分の爪で擦りながら落とさせられたらしい。

おかげで爪もボロボロになった、と見せてくれた。

僕はますますマンションというものが嫌いになった。

だいいちエレベーターを待つなんていうのも性に合わなかった。

ああ、マンションなんて二度とごめん、と言いながら僕は次の住まいに向かった。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy